

□報告□

## グループ回想法場面で発揮されている実施者の実践能力

内野 聖子<sup>1</sup> 浅川 典子<sup>2</sup> 橋本 志麻子<sup>3</sup>

### 抄 録

目的：本研究の目的は認知症高齢者を対象に行ったグループ回想法実施場面の録画映像データを観察調査し、グループ回想法場面で発揮されている実施者の実践能力内容を明らかにすることである。

研究方法：グループ回想法は高齢者や実施者に了解を得た上でビデオ録画しながら実施した。録画映像データから認知症高齢者に対する実施者の声かけなどの関わりについて得られた観察調査結果から、内容の類似性に基づいて分類しカテゴリ化した。

結果：高齢者にわかりやすい情報提供などの【参加した認知症高齢者に配慮した回想法展開能力】、高齢者同士をつなげるなどの【参加高齢者の社会性発揮に配慮する能力】、機能低下へのサポートなどの【個々の参加高齢者の持っている力を引き出す能力】の3カテゴリが抽出された。

考察：実施者は高齢者が戸惑わずに参加できるように配慮し、社会性発揮に力を注ぎ、話しを聴くことに重点を置いて本人の持っている力を引き出しながら機能低下をサポートし、その人らしさを大事にして回想法を実践していることが明らかになった。

キーワード：グループ回想法、回想法実践能力、認知症高齢者、録画映像データ、観察調査

## Therapists' approaches during group reminiscence therapy sessions

UCHINO Seiko, ASAKAWA Noriko and HASHIMOTO Shimako

### Abstract

Objective: To classify therapists' approaches during reminiscence therapy sessions for the elderly with dementia, with a view to determining their ability to appropriately perform such therapy.

Methods: Group reminiscence therapy sessions were held and videotaped with elderly participants' and therapists' consent. The obtained recordings were analyzed, and therapists' approaches, such as verbal communication, were classified into categories based on content similarities.

Results: The following categories were extracted: [developing reminiscence therapy in consideration of the characteristics of elderly participants with dementia]: such as providing appropriate information; [promoting elderly participants' sociability]: such as helping them establish relationships with other participants; and [harnessing individual elderly participants' remaining abilities]: such as addressing their decreased functions.

Conclusion: During reminiscence therapy sessions, therapists adopted approaches, including: preventing elderly participants with dementia from facing difficulty in participating, promoting their sociability, addressing their decreased functions by harnessing their remaining abilities through supportive listening, and respecting their personality.

**Keywords** : group reminiscence therapy, skills to implement reminiscence therapy, elderly with dementia, video data, observation and examination

---

受付日：2014年6月23日 受理日：2014年9月1日

<sup>1</sup>国際医療福祉大学 小田原保健医療学部 看護学科

Department of Nursing, School of Nursing and Rehabilitation at Odawara, International University of Health and Welfare  
uchino@iuhw.ac.jp

<sup>2</sup>埼玉医科大学 保健医療学部 看護学科

School of Nursing, Faculty of Health and Medical Care, Saitama Medical University

<sup>3</sup>元 埼玉医科大学 保健医療学部 看護学科

Former School of Nursing, Faculty of Health and Medical Care, Saitama Medical University

## I. 緒言

現在、認知症高齢者は増加の一途をたどり、Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia（以下、BPSDとする）などの種々の問題が起こっている。認知症高齢者への対策の1つとして、1960年初頭にアメリカの精神科医 Robert. N. Butler により提唱された回想法<sup>1)</sup>を含めて、音楽療法等の非薬物療法が行われている。野村は回想法の実施者への効果として一人ひとりの高齢者の生活史や生き方に対する敬意の深まりなどを示しており<sup>2)</sup>、まさにこれは高齢者ケアの根幹をなすものであると考える。

また、介護労働者の離職率が悪化し良質な人材確保の難しさが問題となっており<sup>3)</sup>、畦地は介護職員にとって利用者を受容しきれないと感じること自体がストレスとなっていると報告している<sup>4)</sup>。良質な人材確保、ストレスやバーンアウトへの対策が急務であると考えられる。内野はグループ回想法（以下、回想法とする）を4回以上実施することによる実施者のバーンアウト軽減効果<sup>5)</sup>、回想法の中で高齢者ケア技術が向上するヒントを実施者が得た可能性を報告している<sup>6)</sup>。回想法の実施者がその場で実施している効果的な関わりや発揮している力を実感したりお互いに評価して高め合うことができれば、ストレス緩和に貢献できると考える。さらに、内野はグループ回想法の熟練実施者にグループインタビューを行い、【回想法を円滑に実践していること】や【高齢者ケア能力が向上したこと】などの実践能力を報告しているが<sup>7)</sup>、回想法実施場面で実施者が発揮している実践能力を網羅しているとは言いがたい。

本研究の目的は認知症高齢者を対象に行ったグループ回想法実施場面の録画映像データを観察調査し、グループ回想法場面で発揮されている実施者の実践能力内容を明らかにすることである。また、今後、本研究の結果は、実施者の実践能力を自己評価および他者評価することができるグループ回想法実践能力尺度（質問式）（観察式）を作成する際の一助とする。

<用語の操作的定義>

1. 回想法実践能力：グループ回想法の実践を積み重

ねた者が参加高齢者にとって最大限の効果を目指して実践する能力とする。実施体験の積み重ねにより回想法を円滑に実施でき、高齢者ケア能力の向上を実感していることが示されており<sup>7)</sup>、高齢者への関わり方を含めて有効な回想法が行われていると考える。また、実施回数が少ない者がグループ回想法の実施体験を積み重ねている者と十分な話し合いのもとで発揮された能力も含むこととする。実施回数が少ない者であっても積み重ねている者と十分に話し合いを行った上での実施内容は高齢者に有効なものであると考える。

## II. 研究方法

### 1. 回想法の実施方法

1) 参加高齢者：以下の選定条件を満たす高齢者が参加した。

- (1) 高齢者福祉施設を利用している認知症高齢者である。
- (2) 認知症の程度は Functional Assessment Staging (FAST) で2～7である。
- (3) 身体症状は安定している。

2) 実施期間：平成22年11月から平成23年3月

3) 実施状況：原則、週に1回、毎週同じ曜日、午後の時間帯で、1クール8回を2クール実施した。時系列に沿ってテーマを設定し、テーマに関連する道具を活用しながらグループ回想法を実施した。

また、実施者同士で、回想法実施前には前回からの申し送り事項を確認しながら準備し、終了後には高齢者の参加状況や実施方法の工夫の必要性等について振り返りを行った。

### 2. 回想法実施場面の観察調査

1) 対象者：以下の選定条件を満たす回想法実施者を対象者とした。

- (1) 回想法の研修会や勉強会に参加したことがある。
- (2) 認知症高齢者が参加した回想法を実施したことがある。

2) 研究期間：平成22年11月から平成24年8月

- 3) 実施場所：高齢者福祉施設内の一室
- 4) 実施方法
- (1) 回想法実施場面の録画する旨を説明し、認知症高齢者、回想法の実施者に了解を得た上で行った。
  - (2) 回想法実施場面における実施者の発言内容について逐語録を作成した。
  - (3) 録画された回想法実施場面について、認知症高齢者に対する回想法内での実施者の関わりとして声かけ、高齢者が有する障害への対処などの動作を観察した。
- 5) 分析方法

発言内容の逐語録を作成し動作の観察結果を追加して、質的記述的分析を行った<sup>8)</sup>。「参加高齢者への関わり」「回想法の展開」に関連する文章を抽出し、それをコード化した。意味内容の類似性に基づいて類似したコードをサブカテゴリ化し、その後カテゴリ化した。また、回想法実施者から協力を得てカテゴリ化した結果が意図していることと異なっていないかを確認し、老年看護学および質的研究の専門家、非薬物療法経験者から複数回スーパーバイズを受けながら分析を行った。

3. 倫理的配慮

対象者が所属する組織の管理職者に許可を得て、倫

理審査委員会に相当する会議にて研究の承認を受けて行った。対象者（高齢者、回想法実施者）に対して研究の目的・方法、研究への自由参加、不参加でも不利益がないこと、匿名性の遵守、データ管理の徹底、秘密の厳守、研究終了後データは破棄されることを口頭と文書で説明し、同意書により承諾を得た。また、高度認知機能低下がある高齢者の場合は家族から代諾を得るとともに、毎回の開始前の参加意思確認も慎重に行った。なお、本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会から承認を得て実施した（承認番号：10-78）。

III. 結果

1. 参加した高齢者の基本属性（表1）

回想法に参加した高齢者15人の年齢は90歳代が5人、80歳代が8人、70歳代が2人であった。性別は女性14人、男性が1人であり、認知症の疾患はアルツハイマー型認知症が7人、脳血管性認知症が4人、老人性認知症が4人であった。なお、グループ回想法は、高齢者9名が参加したグループと6名が参加したグループの2つのグループで行われた。

2. 回想法実施者の基本属性（表2）

回想法実施者は17人であり、年齢は70歳代が1人、60歳代が5人、50歳代が2人、30歳代が8人、20歳代が1人で、性別は女性が9人、男性が8人であった。

表1 グループ回想法に参加した高齢者の基本属性

グループ	年齢	性別	疾患名	症状	認知症の程度 <sup>§1</sup>	
1	a	90歳代	女	アルツハイマー型認知症	意欲低下、左麻痺あり	5
	b	80歳代	女	老人性認知症	意欲低下	4
	c	80歳代	男	アルツハイマー型認知症	特になし	2
	d	80歳代	女	アルツハイマー型認知症	周囲への関心低下	5
	e	90歳代	女	脳血管性認知症	行動意欲低下	6
	f	80歳代	女	脳血管性認知症	意欲低下	6
	g	90歳代	女	アルツハイマー型認知症	傾眠傾向	6
	h	70歳代	女	アルツハイマー型認知症	行動の一貫性なし	6
	i	70歳代	女	アルツハイマー型認知症	意欲低下	7
2	j	80歳代	女	脳血管性認知症	妄想、不安、興奮	5
	k	80歳代	女	アルツハイマー型認知症	満腹感なく空腹の訴え	5
	l	80歳代	女	脳血管性認知症	言語能力の低下	6
	m	80歳代	女	老人性認知症	徘徊、不安、同じ事を何度も聞く	6
	n	90歳代	女	老人性認知症	不安	5
	o	90歳代	女	老人性認知症	帰宅要求	5

§1：認知症の程度は、Functional Assessment Staging (FAST) を用いて判定した。

表2 グループ回想法実施者の基本属性

	年齢	性別	現在の職種	現在の職場の 勤務年数(ボランティア 活動年数)	回想法 体験回数
A	60歳代	女	ケアマネージャー	8ヶ月	450
B	60歳代	女	回想法ボランティア	4年	55
C	50歳代	女	回想法ボランティア	3年	76
D	60歳代	男	回想法ボランティア	2年	52
E	70歳代	男	回想法ボランティア	1年	14
F	60歳代	女	回想法ボランティア	1年	8
G	60歳代	女	回想法ボランティア	4年	6
H	30歳代	女	介護職	2年	1
I	30歳代	女	介護職	2年	1
J	30歳代	男	介護職	10年	6
K	50歳代	女	施設長	15年	50
L	30歳代	男	生活相談員	4年	4
M	30歳代	男	介護職	11年	20
N	30歳代	男	介護職	9年	20
O	30歳代	男	介護職	4年	4
P	20歳代	男	介護職	4年	4
Q	30歳代	女	介護職	9年	20

グループ回想法の実施体験回数は1回から450回であり、実施体験回数が少ない者も含まれていたが、グループ回想法実施前後で綿密な打ち合わせや情報交換を行いながら進めていた。

3. グループ回想法における実施者の実践能力

分析した結果、サブカテゴリは35、カテゴリは3であった。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを< >で示す。【参加した認知症高齢者に配慮した回想法展開能力】、【参加高齢者の社会性発揮に配慮する能力】、【個々の参加高齢者を支える能力】の3カテゴリが抽出され、カテゴリごとにサブカテゴリを示す。

1) 【参加した認知症高齢者に配慮した回想法展開能力】(表3-1)

参加した認知症高齢者に配慮しながらグループ回想法を展開する能力である<高齢者が戸惑わないように準備し、参加高齢者を迎え入れる>、<高齢者が思い出せるように道具を提示する>、<高齢者が言ったことに対し、高齢者の思いに寄り添って共感する>、<高齢者の保持している力(記憶力など)に着目する>などの15サブカテゴリであった。

2) 【参加高齢者の社会性発揮に配慮する能力】(表3-2)

グループで行っていることを活かして認知症高齢者の社会性発揮に配慮する能力である<参加者同士をつなげる>、<高齢者が思い出せるように他の参加者からの言葉を伝える>などの3サブカテゴリであった。

3) 【個々の参加高齢者の持っている力を引き出す能力】(表3-3)

高齢者が参加しやすくなるように、障害などに対して支援しながら参加している認知症高齢者それぞれが持っている力を引き出す能力である<高齢者の難聴・理解力低下などの機能低下に対応する>、<高齢者の話を相手の身になって聴く>などの17サブカテゴリであった。

IV. 考察

本研究では、グループ回想法実施場面の録画映像データを観察調査し、実施者の回想法実践能力を明らかにした。以下、熟練した回想法実施者にグループインタビューした先行研究結果<sup>7)</sup>と比較しながら、参加した認知症高齢者に配慮した回想法の展開に必要な能力、参加した認知症高齢者の社会性発揮への配慮に必要な能力、参加した認知症高齢者個人々人への支援に必要な能力について考察する。

表 3-1 【参加した認知症高齢者に配慮した回想法展開能力】

サブカテゴリ	エピソードの一例	代表的なローデータ(語られた内容・観察された内容)
1. 高齢者が戸惑わないように準備し、参加高齢者を迎え入れる	高齢者の席を提示し円滑に座れるようにする 高齢者個々人に参加簿を準備する	こちらがお席ですよ。」と笑顔で言う 「参加簿を作って、お持ちしていました。」と言う
2. 高齢者が戸惑わないように終了する	終了時にはお茶を準備して手際よく出している 歌を歌って、クールダウンして回想法を終了する	(回想法が終わる頃に)「それでは、お茶をいただきたいと思ひます。」と言う 「最後なので、みなさんでふるさとの歌を歌って、このすみれの会を終わりにしたいと思います。よろしいですか。」と言う
3. 回想法の場を楽しい雰囲気になるように盛り上げる	ポジティブな内容を取り入れて話しをする 実施者自身の昔の体験について具体的に話しをする	「そうですよ。よく、笑門には福来たると言いますよね。」と言う 「私ね、小学校の低学年の時は、古い学校だったので、ぞうきを絞って、長い板の間の廊下を並んで、よーいどんではーっと。」と言う
4. 季節感を大切に	高齢者が季節感とともに懐かしい思いを感じられるように働きかける グループ回想法が実施された時期の話題で話しをする	「○○さん、どうですか。明治神宮は秋になると銀杏とかあるんですかね。」と言う 「節分で、豆まかね。」と言う
5. 参加高齢者全員がグループの一員として参加できるように配慮しながら回想法を進行する	参加者全員が集中して始められるように会の開始について話しをする その日に展開される内容を参加者全員が把握できるように話しをする	「はい、よろしいでしょうか。じゃあ、みなさん、始めたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。」と言う 今日は第1回目なので、「ふるさと」ということをやりたいと思ひます。」と言う
6. 高齢者が集中力を高められるように	高齢者が見ていることを確認して参加簿を見せながら話しをする 高齢者の味覚に働きかける	「今回はね、思ひ出語りの会ね、私、赤い参加簿を作って参りました。」と(参加簿を見せながら)言う 「ちよつとみなさんに味わっていただきたいの。」と言う
7. 高齢者が五感を活用できるように働きかける	高齢者の要望を聞いて実際に実施できるように計画する	(たこ焼きを食べたい高齢者がいて)「皆さん、いま、うれしい情報がありました。こちらでそれ(たこ焼き)を作ってみるそうです。いつか分からないけれど、やってみよう。」と言ひ
9. モデリング(デモンストレーション)を行う	実施者が最初に思ひ出語りをする 歌うときに歌の最初の歌詞を伝える 道具を準備して、参加した高齢者が実際に使ってみるよう働きかける	「それから、まず、私から参りますね。よろしいでしょうか。」と言う 「お正月の歌っておぼえてます? もーいーくつねーと。」と言う 「ああ、こつ風だね。」と防空すきを高齢者の肩から掛けてみる
10. 高齢者が思ひ出せるように道具を提示する	参加した高齢者に道具を準備してきたことを伝える 高齢者の話しの内容に関心を持って共感する 高齢者のポジティブな感情に共感する 高齢者のネガティブな感情に共感する	「私ね、今日はね、こんなものを持ってきました。」といりながら、そるばんを出す 「なるほどね、いいですね。」と言う 「うれしかったですよ。」と言う 「さみしかったわね。そういつときはね。」と言う
11. 高齢者が言ったことに対し、高齢者の思ひいに寄り添って共感する	高齢者の話しの内容に共感する 高齢者のポジティブな感情に共感する 高齢者のネガティブな感情に共感する	「さか。(懐中電灯などの非常時に必要な物品)持って、すぐ逃げられるようにね。」と逃げるジェスチャーをつけて言う 「校門を出るときには敬礼? ふう?」と敬礼のポーズをとりながら言う
12. ジェスチャーを用いて高齢者に分かりやすく情報を伝達する	ジェスチャーを交えて、災害時に避難したときの話しをする ジェスチャーを交えて、学校の話しをする	「調理師だからね、薄味だね、薄味のお料理をね。いいですね。」と(昔、料理をしていいた)○○さんの方向に手をさして言う (回想法が始まる前に、薬の服用を必要とする高齢者がいる状況)「それじゃあ、始まる前に○○さんのお薬を待ちましょう。」と言う
13. 高齢者の保持している力(記憶力などに)に着目する	料理していたことの記憶を活かして話しをする	
14. 回想法の場で待っている高齢者に配慮する	始まる前に待っているときの状況を分かりやすく伝える	
15. 途中参加者・途中退場者へ配慮する	途中参加した高齢者に待っていたことを伝える	「途中から参加した高齢者に向かって」○○さん、お待ちしていました。」と言う

表 3-2 【参加高齢者の社会性発揮に配慮する能力】

サブカテゴリ	コードの一例	代表的なローデータ(語られた内容・観察された内容)
1.参加者同士をつなげる	参加者みなさんで過ごしていることを意識できるように働きかける 苦勞していることを他の多くの高齢者が分かっていると伝える	「皆さんお元気で。何かのご縁でね、皆さん、ここに一緒にね、お話しができるんですのね。」という 「ここでお会いできてね、〇〇さんのご苦勞を△△さんも、××さんも、◎◎さんも、□□さんもみなさん分かってくれている。」と言う
2.高齢者が思い出せるように他の参加者からの言葉を伝える	共通していることが予測される学校に通っていたときの話しを他の高齢者に伝える 走るのが速くて負けず嫌いであるという話しを他の高齢者に伝える	「〇〇さん、△△さんはね、ときどきは妹と一緒に(学校)に行くけれども、時々は近所のお友達と一緒にいたりして。」と言う 「〇〇さん、△△さんは富山の尋常小学校で、走るのがすごく早かったって。負けるの嫌いだって。」という
3.(高齢者の自尊心を高めるように)他の参加者の言葉を伝える	昔の暮らしの良い点を感じてもらおうように他の参加者からの言葉を伝える 他の参加者が褒めていることを伝える	「〇〇さんは、東京の×××。××のお屋敷街ですよ。いま、△△さんが高級住宅地でしたよっておっしゃってられました。」と言う 「〇〇さんがね、えらいですよって。」と言う(△△さんに向けて)

1. 参加した認知症高齢者に配慮した回想法の展開に必要な能力

本研究結果から高齢者が戸惑わないように配慮して準備を行い、道具を活用しながらわかりやすく情報提供をし、共感し、高齢者が保持している力に着目することなどを行いながらグループ回想法を展開していることが抽出された。本研究で参加した認知症を有する高齢者には記憶力低下の他、見当識能力の低下などのさまざまな症状があり、グループ回想法への参加困難を未然に防ぐように高齢者の戸惑いに配慮して進めたり、高齢者にとってわかりやすい情報を提示するような言動が抽出されたと考える。先行研究<sup>7)</sup>では、実施者が回想法を円滑に進められるように準備していることが報告された。円滑な準備により認知症高齢者が安心して参加できる環境が求められるが、本研究でもそれを支持する結果が得られた。回想法の場では円滑に回想法の開始や終了をして高齢者の不安を高めることがないように配慮し、わかりやすい情報提供を目指して、高齢者のできていることを活かせるように展開することで高齢者の残存機能を引き出せる可能性があると考えられる。

また、高齢者が話す内容に共感するということは高齢期を経験していない者にとって難しいことではあるが、回想法を効果的に行うためには非常に重要である。黒川は回想法のスタッフに求められる基本的な姿勢は心理療法の基本をなす「受容的」「共感的」な姿勢であるが、まだ人生経験が浅くて若いスタッフが高齢者の回想に共感できる深さにはある種の限界がつかまとうと指摘している<sup>9)</sup>。野村らは良い聴き手の条件として話を批判的にではなくそのまま受容すること、今何を感じているか、その気持ちを大切にすることなどをあげている<sup>10)</sup>。

以上のことから、認知症による参加しにくい状況に対しわかりやすく情報提示することなどによって、高齢者が感じる戸惑いに配慮して進めることが求められる。また、その配慮を十分に行うためにも経験が浅い実施者ができるだけ困らないように熟練者とともに実施できる環境を整えたり、受容や共感などについての

表 3-3 【個々の参加高齢者の持っている力を引き出す能力】

サブカテゴリ	コードの一例	代表的なローデータ(語られた内容・観察された内容)
1. 親近感を示す(握手など)	話しをするときにスキミングする	「○○さん、プナの甘露煮と金、どじおとかね、お好きですか。七手を握って言う
2. 家族を大切に思っていることを受け止める	家族との思い出をじっくり感じられるように働きかける 母親の味付けを受け継いでいることについて受け止める	「お父さんと一緒にだったんですって。お父様が学校まで送ってくださって。」と言 「そっか味付けは、○○さんが漬物とかの味付けで、引き継いでいらっしやる。お母さ んの。」と言
3. 高齢者が苦勞してきたことを受け止める	高齢者が苦勞してきたことについて受け止める	「やっぱりね、みなさんそれぞれに苦勞なさっているんだなっていうら、今日はそんな お話しを聞かせていただいて。」と言
4. 高齢者に無理強いをせず、意思決定を尊重する	お話ししたくないときははしなくて良くて自由であることを伝える	「お話ししたくないときは遠慮なさらないでください。」と言
5. 高齢者の価値観を重視する	学校で努力して過ごしていたことの思いを受け止める	「いつもね、努力をしないといけない。すばらしいことですよ。がんばって努力をしな いとけない。」と言
6. 高齢者が言えなかったことを代弁する	生き方において価値をおいてきたことを受け止める	「これから○○さんの提案に従って、ここにいる皆さんの心にしみいるような、きれいな 正しい言葉を使いましょう。」と言
7. 高齢者の言ったことをその人の思いに配慮しながら具体的に補足したり言い換える	高齢者の自尊心維持・向上につながる話しの内容を代弁する	(高齢者が小声で話して遠慮がちにしていて)「もう一つ秘密を教えてくださいました。 富士山に一人で登るときは、聖歌隊をしていたので歌を歌いながら登るそうです。」と 言
8. 高齢者の記憶力低下に対応する	昔の生活状況に配慮して別の言葉を用いて話しをする	(小さい頃に体が弱くて出かけられなかったと話す高齢者に対して)「だから、あんまり 外に出なかつたんですね。」と言
9. 高齢者の難聴・理解力低下などの機能低下に対応する	時間の経過によって忘れることがあると話しをする	「もう80年も前だと忘れちゃいますよね。」という
10. 高齢者が展開について行けるように対応する	高齢者の聴力低下や理解力低下に配慮して再度伝える	「東京に来られるのに、国鉄ですか。」と(他の実施者が聴いた後)再度言う
11. 高齢者が思い出せるように具体的に質問する	不安そうな表情をしている高齢者に展開されている内容を具体的に質問す る	(話を聞いているが不安そうな表情で黙っている高齢者に)「○○さん、(いまは)小学 校の思い出話していいね。」と言
12. 高齢者が思い出せるように高齢者の言ったことを繰り返して言う	高齢者が仕事をしていたときのことを具体的に思い出せるように質問す る	(お店をしていた高齢者に)「(お店のお客さんは)たくさんいらっしやる。おかげは？ さん、焼いたり、つけるのは？」と言
13. 高齢者の快感情をうながすように高齢者の言ったことを繰り返す	高齢者が話しをした同じ内容を繰り返して学校の話しをする	(○○さんが話した後)「○○さんは、学校の門の前が家だった。」と言
14. 高齢者の快感情をうながすようなポイントに着眼する	昔の遊びなどの楽しさについて高齢者の話しを繰り返す	「小さい頃の遊びのことでおどろかされた。○○さんは中に小豆を入れて作って、4つ くらいやられたよ(お手を左右交互)って。」と言
15. いま、回想法の中で展開されている話題・ことを伝える	学校生活の中でのすばらしい体験に対して賞賛の思いを伝える	(学校を休まず皆勤賞だったことに対して)「すごい。」と言って、拍手する
16. 高齢者の話しを相手の身になって聴く	展開に合わせて、高齢者に実施してほしい内容を伝える	「○○さん、みなさんにお名前をよるしくお願いいたします。」と言
17. 回想法の中で必要な身体ケアを行う(車いす上の体位調整など)	高齢者のタイミングで話せるようにする 状態変化があった人へ対応する 座位でいるときの体制を整える	視線を向けて話し始めるまで待っている むせた人の背中をタッピングしている 椅子からすり落ちそうになっている人の体勢を整える

研修会やスーパービジョンの機会を提供することも必要である。

## 2. 参加した認知症高齢者の社会性発揮への配慮に必要な能力

本研究結果から高齢者の社会性発揮の支援として、参加者同士をつなげること、他の参加者からの言葉を伝えることなどが抽出された。先行研究<sup>7)</sup>では高齢者同士の関係性を築けるように配慮していることが報告され、本研究でもそれを支持する結果が得られた。黒川はグループで行うと互いの話に触発されて忘れていた記憶がよみがえるという利点があると述べている<sup>9)</sup>。さらに、ロナルドらはグループ活動ではメンバーがお互い共感的に応答し分かち合う経験を、確かに価値あるものであると確認することができるように援助するものであることを提示している<sup>11)</sup>。グループ回想法ではグループであることを最大限活かして実施することが求められるため、高齢者がしっかり参加できるように促し、グループでともにいること、他者との関わりの中に価値を見いだせるように関わる必要がある。

また、本研究で参加した高齢者は日常生活では認知症を有していることでコミュニケーション障害が生じ、他者との関わりがほとんどない高齢者もいると考えられる。これらは、認知症を有することによって、孤独感、不安につながるものである。高齢者の社会性発揮に配慮した回想法の場合では、自尊心を保持し、参加した高齢者にとって、なじみの関係を作ることにつながり、より心地よいところとなると考えられる。水野は認知症ケアに携わる人に望まれる資質として尊重、話し合う（相互理解する）、ともに行うことなどを提示している<sup>12)</sup>。認知症高齢者ケアにおいても話し合いのもとで、ともに行うということの重要性が示されており、グループであることを最大限活かした関わりが重要である。グループ回想法でもグループの力を活用しながら、高齢者個人個人にとっての効果を最大限にしていく姿勢が重要であると考えられる。

以上のことから、社会性発揮に着目して関わること

によって、認知症高齢者の孤独感や不安の軽減に役立てられるようにグループで行うことを最大限活かしていく関わりが求められる。

## 3. 参加した認知症高齢者個人への支援に必要な能力

本研究結果から高齢者が有する機能低下をサポートすること、高齢者の身になって話を聴くことなどが抽出された。先行研究<sup>7)</sup>では回想法の場合が高齢者のもつ力や実施者のサポートにより認知症のために参加困難とならないよう整えられていたことが報告され、本研究でもそれを支持する結果が得られた。

本研究で回想法に参加した認知症高齢者には記憶力低下の他、徘徊や妄想などのBPSDが出現している状況もあったが、グループ回想法の実施環境を整え、機能低下への支援が適切に行い、高齢者個人個人がもっている力が認められることによって安心して参加することが可能となると考える。さらには、認知症のために日常生活上ではかなりの支援を必要としていても、高齢者本人が保持している力を発揮できるように十分支援していくことで自尊心の維持や向上につながると考えられる。

また、回想法は高齢者の心を支えながら、その人の思いや考えをしっかり聴くことがまず大事である。小松らは認知症高齢者ケア技術の1つとして波長あわせをあげており、高齢者の話を聴き、真正面から向き合うことが重要であると示している<sup>13)</sup>。また、野村らは高齢者を「理解したい、知りたい」という援助者の気持ちによって、高齢者は「自分を見ていてくれる、興味を持っていてくれる」と感じ、安心感や喜びを高めることが多いと記述している<sup>14)</sup>。話をしっかり聴いてくれていると感じることで、その場での安心感につながると考える。高齢者がそのときその場で話したいことを聴き、高齢者の思いをその人の言葉で表現されるように関わることを求められる。そのことが高齢者のその人らしさを大事にすることとなり、参加満足度の向上につながると考えられる。

以上のことから、話しを聴くことに重点を置きなが



ら、高齢者の機能低下へのサポートをすることが重要であると考えられる。

#### 4. 本研究の限界と今後の展望

本研究の対象者は少数であり、結果を一般化することは難しい。しかし、経験を積み重ねた者が主として展開したグループ回想法を観察調査して得られた本研究結果は意義があると考えられる。

しかし、熟練した回想法実施者が実施している状況ではない場合もあり、経験が少ない者でも、実施内容の質を低下させることなく経験を積み重ねていけるようにすることが求められる。そのためには熟練した回想法実施者と話し合いができる環境やスーパーバイズを受けることができる環境を整えること、自分を客観的に見つめて向上していけるように回想法実施者が自己評価や他者評価できる尺度を活用することが有効であると考えられる。

これらにより、参加高齢者に効果的な質の高いグループ回想法を目指せると考えられる。

#### V. 結語

回想法実施場面の録画映像を観察調査した結果、回想法実施者は、認知症による参加しにくい状況を未然に防いで安心して過ごせる環境を整えるなど高齢者に配慮した回想法展開していること、社会性発揮に配慮していること、話しを聴くことに重点を置きながら機能低下へのサポートすることで、その人らしさを大事にして実施していることが示された。

#### 謝辞

本研究を進めるにあたって多大なご尽力をいただきました関東圏内高齢者福祉施設の元総合施設長・福島廣子様、元施設長・吉田敦子様、施設長・有賀章子様、野中恭子様、本研究にご協力くださった皆様から

御礼申し上げます。

なお、本研究では報告すべき利益相反はなく、JSPS 科研費 22592615（研究(C)（研究代表：内野聖子）の助成を受けて実施したものの一部である。また、本研究の一部は第31回日本看護科学学会、第32回日本看護科学学会、日本老年看護学会第17回学術集会で発表した。

#### 文献

- 1) Butler R N. The life review : an interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry* 1963; 26: 65-76
- 2) 野村豊子. 回想法とライフレビュー その理論と技法. 第1版. 東京: 中央法規出版, 1998
- 3) 公益財団法人介護労働安定センター. 平成24年度介護労働実態調査結果について(事業所における介護労働実態調査及び介護労働者の就業実態と就業意識調査). <http://www.kaiho-center.or.jp/report/> 2013
- 4) 畦地良平, 小野寺敦志, 遠藤忠. 介護職員の主観的ストレスに影響を与える要因—職場特性を中心とした検討—. *老年社会科学* 2006; 27: 427-437
- 5) 内野聖子. 認知症高齢者を対象にして行ったグループ回想法に参加したケアスタッフのストレスマネジメント効果～参加回数別に見たケアスタッフのバーンアウトとコーピング状況の変化を中心として～. *お茶の水医学雑誌* 2007; 55: 55-76
- 6) 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子ら. グループ回想法を実施したケアスタッフへの高齢者ケア実践における効果. *日本認知症ケア学会* 2011; 10: 68-78
- 7) 内野聖子, 浅川典子, 橋本志麻子ら. 実施者が発揮しているグループ回想法実践能力. *日本認知症ケア学会誌* 2012; 11: 551-562
- 8) グレック美鈴, 麻原きよみ, 横山美江. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして. 東京: 医歯薬出版, 2007
- 9) 黒川由紀子. 高齢者の心理療法 回想法. 東京: 誠信書房, 2005
- 10) 野村豊子, 青井夕貴, 伊波和恵ら. Q&Aでわかる回想法ハンドブック「よい聴き手」であり続けるために. 東京: 中央法規出版社, 2011
- 11) ロナルド.W. トーズランド, ロバート.F. ライバス(1984), (監訳) 野村豊子: グループワーク入門 あらゆる場で役に立つアイデアと活用法. 東京: 中央法規出版, 2008
- 12) 水野裕. 実践パーソン・センタード・ケア. 東京: ワールドプランニング, 2008
- 13) 小松光代, 黒木保博, 岡山寧子. 介護老人福祉施設における痴呆性高齢者ケア技術の明確化—介護スタッフの日常生活援助場面への参加観察による質的分析—. *日本認知症ケア学会誌* 2003; 2: 56-67
- 14) 野村豊子, 青井夕貴, 丹野克子ら. 介護福祉士養成テキストブック⑤ コミュニケーション技術. 京都: ミネルヴァ書房, 2010